

平成28年1月19日(火)

老球の細道201

## 『働かないアリに意義があり』

会津バスケットボール協会 室井 富仁

【イソップの「アリとキリギリス」を引くまでもなく、アリは働き者として知られています。確かに、昼休みに公園に行けば、夏の暑い最中にたくさんのアリたちが地上を歩き回り、エサを探しています。あなたがこぼしたアイスクリームに集まってくることもあるでしょう。ああ、こいつもがんばっているんだ、と思ったりするかもしれません。

でも、ちょっと待ってください。ご存じのとおり、アリの巣は地下にあり、地表でエサ探ししているものの何十倍もの働きアリが巣の中にいます。ということは、私たちは普段、「エサ探し」という仕事のために地上に出てきている働きアリだけを見ていることとなります。そりゃあ、みんな働いているわけです。しかし、地下にいるたくさんの働きアリ、そいつらもみんな働いているのでしょうか？本当にアリは働き者なのでしょうか？】

・・・『働かないアリに意義がある』(長谷川英祐著 メディアファクトリー新書)・・・

常識は破られる。著者の研究によると、実は、巣の中の7割ほどの働きアリが「何もしていない」ことが実証された。案外、アリは働き者ではなかったわけである。しかし、このことはアリがさぼっているわけではなく、アリにはアリの働かない理由がアリだった。

集団の中で働いていたアリが疲労して働けなくなると、仕事が処理されずに残る。それではコロニーが機能しなくなるので、今まで働いていなかったアリたちが働き出す。それらが疲れてくると、今度は休息していたアリ達が疲労回復して働き出す。こうして、いつも誰かが働き続け、コロニーのなかの労働力がゼロになることがないようにする。

一方、みんながいっせいに働くシステムは、同じくらい働いて同時に全員が疲れてしまい、誰も働けなくなる時間が生じてしまう。するとコロニーは長期間は存続できなくなってしまう。だからこそ、「働かないアリ」という無駄な存在が必要だった。

誰もが必ず疲れる以上、働かないものを常に含む非効率的なシステムでこそ、長期的な存続が可能になる。働かない働きアリは、怠けてコロニーの効率をさげる存在ではなく、コロニーの存在に極めて重要な存在なのである。

現役教員の頃、「保健」の授業に行くと、休み時間を利用して主要5教科の課題の仕上げに血眼になっている生徒が目についた。不届き者になると保健の授業が始まっても内職と称して仕事を続ける働きアリがいた。今社会で問題になっている知的好奇心をそそる色々なできごとを授業のウォーミングアップとして話す、目先の短期的損得にしか関心のない生徒達は一心不乱に内職に励む。まさに井上陽水「♪傘がない♪」の歌詞の世界。

「保健」や「体育」、「バスケットボール部活」などは大学受験などに役立たないから「働かないアリ」と同じ立場である。目先の短期的損得にしか価値を見いだせない進学校の優等生にとっては無駄なようなことでも長期的視野で見るとわからない。

世の中は常に変わっている。平穏な日々などいつまで続くかわからない。毎日が予測不可能な変動環境である。ゴールはないし、どうすればゴールに行けるのかもわからない。「安定した生活」などない。そんな時代だからこそ、短期的な損得に身を肥やすことなく、無駄に意味を見だし、それを楽しめるような毎を送りたいものである。この本は私にとって無駄な読書のように思われたが、無駄や余裕の大切さを再認識させてくれた。